立命館大学大学院
2025年度実施　入学試験
博士課程前期課程
文学研究科
人文学専攻・文化動態学専修

入試方式	実施月	コース	専門科目 ※英語による問題を含むことがある	
			実施・公開	備考
一般入学試験	9月	高度探究	P.1～	
	2月		P.7～	一部窓口公開のみ （WEB非公開）
社会人入学試験	9月	高度探究		
	2月			
外国人留学生入学試験 （RJ方式）	9月	高度探究	×	
	2月		P.7～	一部窓口公開のみ （WEB非公開）
学内進学入学試験	9月	高度探究		
	2月			
APU特別受入入学試験	9月	高度探究		
	2月			

【表紙の見方】
×・・・入学試験の実施がなかった等の理由で入学試験問題の作成がなかったもの、または、問題を公開しないもの
斜線・・・学科試験（筆記試験）を実施しないもの

※試験終了後、ホッチキスで綴じること（太線の4箇所）

2026年度　立命館大学大学院文学研究科入学試験問題

2025年9月6日

博士課程前期課程　人文学専攻
文化動態学専修

「専門科目」

全 7 ページ

●受験上の注意

① 試験中、冊子をばらしても構わないが、終了後再び綴じて提出すること
（ホッチキスを貸与します）
② 全ての用紙に受験番号、氏名等を記入し、提出すること

●試験中の持込許可物件について

① 筆記用具、受験票、時計以外の持込は認めない

2026 年度入学試験（2025 年 9 月実施）

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏　　名
人文学専攻 （文化動態学専修）	前期課程	専門科目	□高度探究		

次の二つの文章（A）（B）を読んで、設問（問 1～7）に答えなさい。解答は解答欄（答案用紙の 6 頁目以降）の指定箇所に記すこと。

（A）

一般的には、1687 年のアイザック・ニュートン『プリンキピア』の出版によって啓蒙運動が始まったとされている。そのようなストーリーでは、ニュートンは理性を駆使した孤高の天才として描かれることが多い。しかし『プリンキピア』を読めば明らかなとおり、それは正確ではない。ニュートンが科学における大きなブレークスルーを果たせたのは、帝国や奴隷制、戦争というもっと幅広い世界と関わりを持っていたからこそだ。万有引力の理論を編み出す上でニュートンは、奴隷船で旅したフランス人天文学者や、中国と交易する東インド会社の船員の収集したデータに頼った。今日ではそれはほぼ忘れられているが、当時の人々は十分に気づいていた。フランス啓蒙主義の哲学者の中でもおそらくもっとも有名なヴォルテールは、「もしもルイ 14 世によって派遣された人たちが航海や実験を進めていなかったら、ニュートンが引力に関する発見をおこなうことはけっしてなかっただろう」と記している。

18 世紀を通してヨーロッパ諸国の科学アカデミーは、国家の支援を受けた遠征航海を次々に企画した。それらの航海によってニュートンとその後継者たちは、物理科学でもっとも基本的な疑問のいくつかに答えるためのデータを手に入れた。アンデス山脈へのフランスの遠征によって、ニュートンの唱える地球の形が正しいことが実証され、ジェイムズ・クック船長の太平洋への航海によって、太陽系の絶対的な大きさがようやく確定した。18 世紀にはこれらの理論的な疑問に加え、航海術や測量術など、それに関連した数々の実用的な科学も発達した。イギリスやフランス、ロシアの各帝国は、最新のニュートン科学を駆使して新たに領土を広げていった。クックはタヒチから南へ進んではるかオーストラリアにまで到達し、ヴィトゥス・ベーリングはアラスカ沿岸の地図を作成して、アメリカ大陸の一部を初めてロシア帝国に組み入れた。

とはいえ、ヨーロッパの科学が勝利したという単純な話ではない。ヨーロッパ人探検家は未知の海を渡ったり大山脈に登ったりする上で、独自の高度な科学文化を持った先住民の知識をつねに頼りにしていた。ペルーではフランス人測量士が図らずもインカの伝統的な天文学に頼った。太平洋ではクック船長がポリネシアの神官の航海術に頼った。そして北極圏ではロシアの探検家が先住民を仲間に引き入れて、凍りついた大地を横断するための道案内を頼んだ。彼らの貢献に目を向けると、18 世紀科学のイメージは大きく様変わりする。結局のところ、啓蒙時代の科学の発展はグローバルな歴史の一部として理解する必要があって、そこには奴隷制や帝国の歴史だけでなく、先住民の知識の歴史も含まれる。①ニュートンは確かに天才だったかもしれない。しかし孤立してはいなかったのだ。

2026 年度入学試験（2025 年 9 月実施）

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏　　名
人文学専攻 （文化動態学専修）	前期課程	専門科目	□高度探究		

1745 年、フランシス・ウィリアムズという男がジャマイカの自分の書斎で一枚の肖像画を描いてもらった。その肖像画は多くの点で 18 世紀の典型的な学者の絵に似ていた。ウィリアムズの手前のテーブルには、『ニュートンの自然哲学』と並んで方位磁針や地球儀が置かれている。しかし、従来の科学史のストーリーではしばしばアフリカ系の人々が誤って排除されていることを踏まえると、この肖像画はあるきわめて重要な点で目を見張らせる。ウィリアムズは黒人だったのだ。ウィリアムズが生まれる少し前に、アフリカ人奴隷だった彼の父親は自由を与えられた。そのためウィリアムズも自由人だった。かなり裕福だったようで、のちにジャマイカの土地と奴隷を相続した。1720 年頃には十分な資産を蓄えてイギリスへ渡り、ケンブリッジ大学に入学して数学と古典を学んだ。そしてちょうどニュートンが世を去った頃に、この大学で『プリンキピア』のことを知った。それから数年後、ジャマイカで学校を創設するために帰国し、その際にニュートンの著作を含む最新の科学書を何冊も持ち帰った。もちろんウィリアムズはけっして典型的な人物ではない。当時、カリブ海沿岸のほとんどの黒人にはニュートン科学を学ぶ機会などなかった。しかしウィリアムズは、②奴隷制時代の科学史のもう一つの側面をいまに伝える重要な存在だ。

（B）

まずはしっかりと認識しよう。あなたの賢さは、かなりかさ上げされたものである。一見賢く見えるのは、先祖代々受け継がれてきた知識や技術や習慣など、膨大な文化遺産の宝庫から、知的アプリケーションをふんだんにダウンロードして利用しているからなのだ。

当然、疑問が湧いてくる。ヒトが生まれつき賢いわけではないとしたら、ヒトの能力を高めてくれる、こうした精巧な知的ツールや、複雑な人工物、そして教育の仕組みはいったいどこから来たのだろう？　その答えは、集団脳だ。文化が累積的に進化していくなかで、だれも気づかぬうちに、人類の集団脳から生まれたのである。

ヒトは高い文化習得能力と豊かな社会性をもつがゆえに、アイデア、道具、習慣、洞察、メンタルモデルのような情報が、別の情報と結びつきながら、個々人の間を伝わっていく。その過程で、学習の成否、繁殖成功度、集団間競争といったフィルターにかけられて、あるものは歴史のゴミの山に捨てられ、あるものは次世代へと引き継がれ、しだいに高度で洗練されたものができあがっていくのである。

大天才がたった一人で偉業を成し遂げるということは滅多にない。知の営みについての歴史が示すように、累積的文化進化の地殻変動によって、一人の力では越えられない知識の溝が縮められてはじめて、多くの人が自力で知識の溝を越えられるようになるのである。

2026 年度入学試験（2025 年 9 月実施）

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏　　名
人文学専攻 （文化動態学専修）	前期課程	専門科目	□高度探究		

ヒトが他の動物よりも頭がいいのはなぜか――その理由は、文化的な面と遺伝的な面の両方からいくつか挙げられる。しかし、究極の要因は、③ルビコン川を渡る橋を見つけたこと、そして、累積的文化進化の力に牽引されながらついに対岸にたどりついたことにあるのだ。

たしかに、私たちは賢い。しかしそれは、巨人の肩の上に乗っているからでもなければ、自らが巨人だからでもない。④私たちは、多数の小人たちが寄り集まってできた巨大なピラミッドの上に乗っているのである。ピラミッドが高くなると、小人たちの背丈も少しは伸びるが、私たちがかなたを見渡せるのはやはり、小人たちの数の力なのであって、特定の小人が長身だからではない。

このようなプロセスはすべて、現在もまだ進行中だ。累積的文化進化、集団間競争、そして文化－遺伝子共進化は、今もなお続いているどころか、むしろ一万年前から加速している。一万年ほど前に地球の気候が安定し、食料生産が容易になったことで、集団間競争が激化し、その結果、新たな仕組みや決まりが生まれて、社会がますます大きくなり、さらに多数の人々を擁するようになっていった。つまり、集団間競争が繰り広げられるなかで、よそ者をも信頼して公正に扱い、協力し合うことを促す新たな社会規範が生まれて広まっていき、そうした規範を維持するために、多種多様な政治的、宗教的、社会的な制度が作られ、その複雑さの度合いを高めていったのだ。

もちろん、テクノロジーの分野では大きな変化があった。特に緯線に沿った交易や移住を通して相互連絡のある大規模な社会ほど、集団脳のサイズが大きくなり、ますます複雑な道具、技術、習慣、知識を蓄積し続けていくようになった。そのことは、西暦 1500 年頃にどれだけ複雑な技術をもっていたかを大陸ごとに比較してみるとよくわかる。

圧倒的に複雑な道具やノウハウの蓄積があったのが、ユーラシア大陸だ。それはひとつには、中東、中国、インド、ヨーロッパといった地域間の相乗作用的な文化交流があったからである。

その対極にあるのが、オーストラリアとニューギニアだった。オーストラリアは、大陸としては最も小さい上に、内陸の不毛な砂漠地帯が状況をますます不利にした。ニューギニアは、ミニ大陸、というよりも実際には非常に大きな島なのだ。

これらの中間にくるのが、南北アメリカ大陸だった。面積自体は大きいが、南北に長く伸びている上に、南北の大陸は、きわめて狭い陸地（パナマとコロンビアの間のダリエン地峡）でしかつながっておらず、現在でも南北を縦断する幹線道路を分断している。また、さまざまな山脈や砂漠が人々の通行を阻んでいる。

国際交易が盛んになって、海上交通路が十分に開かれるまで、ヒトの集団脳は、居住している大陸の面積や地形の制約を受けていたのである。

2026 年度入学試験（2025 年 9 月実施）

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏　　名
人文学専攻 （文化動態学専修）	前期課程	専門科目	□高度探究		

ここで強調すべきは、知識や技術の複雑化があるところまでくるとたいてい、文化進化によって労働の専門分化（実際には、情報の専門分化）が進み始めるということだ。こうして生まれた社会では、集団脳のサイズが、知の最先端に立つ集団――現状を改善できるだけの知識をもっている人々――の規模や相互連絡性でかなり決まってくるようになる。

⑤集団脳の重要性がわかれば、イノベーションを起こす力、つまり革新力が社会によって大きく異なる理由もわかってくる。特定の個人だけが優秀でも、また、上からインセンティブを与えても、イノベーションを起こす力は生まれない。それは、知の最先端を行く大勢の人々が、自由に意見を交わし、遠慮なく反論し、相互に学び合って、協力関係を築き、外部の者をも信頼して、試行錯誤を重ねていく――そのような能力と意欲から生まれるものなのだ。イノベーションには天才も組織も要らない。必要なのは、多数の頭脳が自由に情報をやり取りできる大きなネットワークのみ。それを構築できるかどうかは、人々の心理にかかっており、人々の心理は、諸々の社会規範や信念のパッケージ、およびそこから生まれる公式な制度のもとで醸成される。

インターネットの普及によって、人類の集団脳は劇的に拡大する可能性を秘めている。といってもやはり、言語の違いが地球規模の集団脳の出現を阻むだろう。そして、インターネットによる集団脳の拡大を阻むもう一つの課題は、人類がこれまでずっと直面してきたのと同じ課題。つまり、⑥情報共有に際してのジレンマである。社会規範や何らかの制度がないと、ウェブ上から優れた知恵やアイデアをすくい取るばかりで、自分からは他者に何も提供しようとしない利己的な人が得をする状況が生まれてしまう。現在のところは、名声の獲得といったインセンティブが十分に働いているようだが、コストを負担せずに有益な情報を獲得する新戦略が広がるにつれて、こうした状況も変化していくかもしれない。情報共有に関する向社会的な規範を、インターネット上で長期にわたってどの程度まで維持できるかがカギになるだろう。

［出典］

（A）ジェイムズ・ポスケット『科学文明の起源：近代科学を生んだグローバルな科学の歴史』（水谷淳訳、東洋経済新報社、2023 年）163–166 頁

（B）ジョセフ・ヘンリック『文化がヒトを進化させた』（今西康子訳、白揚社、2019 年）472–480 頁

但し、変更を行った箇所がある。

Used with permission of Princeton University Press, from *The Secret of Our Success : How Culture Is Driving Human Evolution,Domesticating Our Species, and Making Us Smarter*, by Joseph Henrich, 2015; permission conveyed through Copyright Clearance Center, Inc.

2026 年度入学試験（2025 年 9 月実施）

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏　　名
人文学専攻 （文化動態学専修）	前期課程	専門科目	□高度探究		

【設問】

（問 1）下線部①「ニュートンは確かに天才だったかもしれない。しかし孤立してはいなかったのだ。」の意味を具体的に説明しなさい。（解答欄 5 行）

（問 2）下線部②「奴隷制時代の科学史のもう一つの側面」について、具体的に説明しなさい。（解答欄 5 行）

（問 3）下線部③「ルビコン川を渡る」とはここでは何のことか、説明しなさい。（解答欄 5 行）

（問 4）下線部④「私たちは、多数の小人たちが寄り集まってできた巨大なピラミッドの上に乗っている」は何をたとえているのか、説明しなさい。（解答欄 5 行）

（問 5）下線部⑤「集団脳の重要性」について、（A）の内容とも関連させて説明しなさい。（解答欄 7 行）

（問 6）下線部⑥「情報共有に際してのジレンマ」について、（A）の内容も踏まえて説明しなさい。（解答欄 7 行）

（問 7）（A）および（B）の内容で関心のある点（いくつでもよい）について、自由に論じなさい。ただし、自分の研究の対象や方法に触れるなどして、具体的に論述すること。（解答欄 20 行）

※試験終了後、ホッチキスで綴じること（太線の4箇所）

2026年度　立命館大学大学院文学研究科入学試験問題

2026年2月8日

博士課程前期課程　人文学専攻
文化動態学専修

「専門科目」

全 8 ページ

●受験上の注意

① 試験中、冊子をばらしても構わないが、終了後再び綴じて提出すること
（ホッチキスを貸与します）
② 全ての用紙に受験番号、氏名等を記入し、提出すること

●試験中の持込許可物件について

① 筆記用具、受験票、時計以外の持込は認めない

2026 年度入学試験（2026 年 2 月実施）

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏　　名
人文学専攻 （文化動態学専修）	前期課程	専門科目	高度探究		

問題：

以下の四つの断章をよく読み、設問に答えなさい。

問1　現代の人文科学の研究方法として、積極的に「断片」へ着目する意義はどこにあるのか。以下の断章を参照した上で、「断片」に隣接した複数の概念と対比しながら、その方法の限界と可能性とともに私見を述べなさい。

問2　仮に＜断章4＞を、人が複数の断片をひとつにまとめ上げようとして採用してきた/いる、様々な方法をめぐる「寓話」と解するならば、そこにはどれだけの方法が盛り込まれているだろうか。可能な限り列挙し、それぞれについてその特徴とともに簡単に説明しなさい。

問3　上記の設問に答えるために考えてきたことを、自らの研究計画・テーマと関連付けて自由に論じなさい。

＜断章１＞

さきにも書いたが、小学校に入る前ぐらいのときに奇妙な癖があって、道ばたに落ちている小石を適当に拾い上げ、そのたまたま拾われた石をいつまでもじっと眺めていた。私を惹きつけたのは、無数にある小石のひとつでしかないものが、「この小石」になる不思議な瞬間である。

私は一度も、それらに感情移入をしたことがなかった。名前をつけて擬人化したり、自分の孤独を投影したり、小石と自分との密かな会話を想像したりしたことも、一度もなかった。そのへんの道ばたに転がっている無数の小石のなかから無作為にひとつを選びとり、手のひらに乗せて顔を近づけ、ぐっと意識を集中して見つめていると、しだいにそのとりたてて特徴のない小石の形、色、つや、表面の模様や傷がくっきりと浮かび上がってきて、他のどの小石とも違った、世界にたったひとつの「この小石」になる瞬間が訪れる。そしてそのとき、この小石がまさに世界のどの小石とも違うということが明らかになってくる。そのことに陶酔していたのである。

そしてさらに、世界中のすべての小石が、それぞれの形や色、つや、模様、傷を持った「この小石」である、ということの、その想像をはるかに超えた「厖大さ」を、必死に想像しようとしていた。いかなる感情移入も擬人化もないところにある、「すべてのもの」が「このこれ」であることの、その単純なとんでもなさ。そのなかで個別であることの、意味のなさ。

これは「何の意味もないように見えるものも、手にとってみるとかけがえのない固有の存在であることが明らかになる」というような、ありきたりな「発見のストーリー」なのではない。

私の手のひらに乗っていたあの小石は、それぞれかけがえのない、世界にひとつしかないものだった。そしてその世界にひとつしかないものが、世界中の路上に無数に転がっているのである。

（岸政彦「人生は断片的なものが集まってできている」、『断片的なものの社会学』、朝日出版社、2015年、20-21頁）

＜断章２＞

この問題は、公開していません。

（マックス・エルンスト『絵画の彼岸』、巖谷國士訳、河出書房新社、1975年（原著1937年）、28-29頁）

2026 年度入学試験（2026 年 2 月実施）

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏　　名
人文学専攻 （文化動態学専修）	前期課程	専門科目	高度探究		

＜断章３＞

構造とプロセス、「マクロ」の次元と「ミクロ」の次元を、また、クリフォード・ギアーツ流の現地化された「厚い記述」とフレドリック・ジェイムソン流の世界史的「認知地図作成（cognitive mapping）」とを総合する、複合的なアプローチは、今日の社会文化分析の聖杯である。それは、深刻な方法論的障害物と認識論的二律背反に直面している。多くの総合的な議論は、ある「レベル」ないし「尺度」を別のそれに還元し、選び出された部品から複数の全体を創りあげたり、人工的な前景と背景を設定したりする傾向にある。かつて論じたことだが、こうした修辞的／分析的戦略は、偶発的な総合を産出することしかできず、そうした総合は、それを構成するために排除された事項による反駁と見直しに晒される「部分的真実」に他ならない。このような見解そのものは、1980年代を通じて、民族誌のラディカルな批判の一部をなしていた。以来、新たな想定や関与の在り方が支配する民族誌的研究においては、全体論と集合体論とが斑をなす様々な形態が、自覚的に追求されてきた。私自身も、一種の反総合的リアリズムの実験をおこない、並置的な表象スタイルや語りを用いた論考を重ねてきた。絶対的方法を手に入れることはできない。可能なのは、ローカルとグローバル、構造とプロセス、マクロとミクロ、物質と文化といった、硬直した二者択一の外部で機能するような、様々な実験だけである。

広く認められていることだが、グローバル的－システム的アプローチは、歴史的民族誌的個別項を説明すると同時に、それらの個別項によって限界づけられる。逆に、ミクロな分析は、ローカルなものを外に開き、分析的関心のどんな個別の「フィールド」にも忍び込むような、より広範で世界－生産的な様々なエネルギーや力に従属している。私たちは、和解不可能な多くの二律背反のなかで仕事をし、特定の位置をもつ関係的な諸方針をもって私たちの歴史的時点の逆説や緊張関係のなかに分け入り、複数の部分的展望を、引き寄せると同時に押し戻している。結果として得られるのは、現代の社会や文化が作る諸世界の、多尺度的、対話的で終わることがないがゆえによりリアリズム的な理解である。これが少なくとも私の賭け金である。

現代先住民の複合的な領域にアプローチするために、私は三つの分析的用語に依拠する。すなわち、節合、パフォーマンス、翻訳である。これらは、社会と文化の変化について非還元的に考えるための道具箱となるものだ。どれもプロセスをあらわす用語である。この三つの道具――というよりも、おそらく三つの理論的比喩――は互いに補完し合いながら互いを複雑化する。これらは実践的に使用され、体系化に委ねられることはない〔…〕。

節合は、広範な――政治的、社会的、経済的、文化的――接続と脱接続を意味している〔…〕。

パフォーマンスは、今日の社会的、文化的プロセスの両義的な複合性を把握することを助けてくれるもうひとつの鍵となる用語である〔…〕。パフォーマンスを注視することで、私たちはつねに、アイデンティティの維持における様々な行為の特異性と矛盾しあう聴衆に意識的になる。

翻訳は伝達ではない。たとえば、グローバルな（「アメリカの」）文化の広がりを一連の翻訳として見ることは、その外見上の普及を、部分的で不完全な、そして生産的なプロセスとして考え直すことである。何かが持ち込まれるが、しかしそれは改変された形で、ローカルな差異をもって持ち込まれるのである。「翻訳者は裏切り者である〔イタリア語の格言 Traditore tradutore〕」。その間には、いつも何らかの喪失や誤解が存在する。また、何かが獲得され、メッセージのなかに混ぜ込まれる。エズラ・パウンドが言うように、翻訳は「それを新たにする」ことである〔…〕。

翻訳の概念は、伝達、コミュニケーション、あるいは媒介といった言葉よりも、社会生活における凸凹や喪失やその場しのぎの解決などをよく表現している。翻訳の理論／翻訳という比喩は、止むことなく「運び込まれ」、実践の中で変形され再発明される文化的真実の数々に焦点を当て続けることを可能にする。それを取るか取らないかといった形で、ひとつの正しい、あるいは完全なイデオロギーを物象化する傾向は弱められる。また、あなたは属しているのかいないのかという形で、人種的本質や真正の文化的伝統を自然なものと考えることは、より難しくなる。文化翻訳はいつも不均等であり、いつも裏切られる。

（ジェイムズ・クリフォード『リターンズ――21世紀に先住民になること』、星埜守之訳、みすず書房、2020年、50-55頁）

RETURNS: BECOMING INDIGENOUS IN THE TWENTY-FIRST CENTURY by James Clifford, Cambridge, Mass.:
Harvard University Press, Copyright © 2013 by the President and Fellows of Harvard College.
Used by permission. All rights reserved.

2026 年度入学試験（2026 年 2 月実施）

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏　　名
人文学専攻 （文化動態学専修）	前期課程	専門科目	高度探究		

＜断章４＞

数か月来、私はスペインの、岩山のなかのある小さな町に滞在していた。以前からしばしば、いちど周辺地域に出かけて、険しい稜線と暗い松の森林帯に囲まれたこの辺りを彷徨い歩いてみたい、という思いに駆られていたのだ。あちこちに、人目につかない村落があった。たいていの村落は、この楽園のような地域に入植した可能性がかなり高いと思われる聖人たちに因んで、名づけられていた。ここにやって来たのは、しかし夏だった。暑さのせいで、私は自分の目論見を、一日一日と先延ばしにせざるをえなかった。私の部屋の窓からは風車の丘が見え、そこに至る散歩道は誰もに好まれていたのだが、この散歩道さえも、私は結局、あと回しにしようとしてきたのだった。そういうわけで、宿から出かけても、狭くて日陰になった小路をぶらぶら歩き回るばかりだったのだが、それが網の目のように入り組んでいて、そこに入ると、同じ小路を辿って同じ分岐点に出るということが決してなかった。ある日の午後、私はそんなさ迷いのさなかに、絵葉書を売っている雑貨店に行き当たった。少なくとも、この店の窓に数枚の絵葉書が陳列されており、そのなかに、この区域の多くの村落がかつての姿のままに維持してきた、町を囲む壁の写真のものがあった。ところで、それと同じような絵葉書を、私は一度も目にしたことがなかった。それを撮った写真家は壁のすばらしい魅力をつかんでいた。そしてその壁は、ひとつの声のように、壁がながらえてきた幾世紀を貫いて響く讃歌のように、その風景のなかをくねっていた。私は、絵葉書に写し取られた壁を自分の目で見るまでは、この絵葉書を買い求めはしない、と心に誓った。この決意のことは、誰にも話さなかったし、それに、絵葉書が「聖ビネス（S. Vinez）」という説明で私を導いてくれていただけに、この決意をひとに話さないですますことができた。たしかに、私はビネスという聖人のことは何も知らなかった。けれども、この辺りの、他の場所の名の因になっている、ファビアーノや、ロマーノ、あるいはシムフォリーオといった名の聖人のことなら、何か分かっていただろうか？ たとえ、私の持っている旅行案内書が〈聖ビネス〉という地名を挙げていないとしても、そのことには、まずもって、何の意味もないはずだった。この地方に住んでいるのは農民たちで、船乗りたちはこの地方に向かうときの、彼らなりの目印を決めていた。ところが、農民たちと船乗りたちは同じ土地に異なる名を付けていた〔この物語の舞台はスペインのイビサ島だとみなされている〕。そこで私は、いくつかの比較的古い地図を調べてみて、それも役に立たないと分かったとき、航海地図をひとつ手に入れた。すぐに、この航海地図の研究が私を魅了してしまった。そして、事ここに至っては、なおも助けなりよい手立てなりを第三の何かに探し求めたとしても、それは、私の名誉に反しはしなかっただろう。私がまたしても地図や航海地図を眺めて一時間ほど過ごしていた、そのとき、この土地生まれの知人が私を夕べの散歩に誘った。彼は町の郊外の丘へ私を連れて行こうと思ったのだった。つまり、停止されて久しい風車が私に、実にしばしば、松の梢越しに挨拶を送って寄こした、あの丘である。私たちが丘の上に着いた頃に暗くなり始めた。ひと休みしながら月の出を待ち、その最初の光とともに私たちは家路についた。小さな松林から出た。すると月明かりのなかに、近く、見紛いようもなく、ここ数日来私に付き添っていた像のあの壁が、そしてその庇護に包まれて、私たちの帰り行く町が、横たわっていた。私はひと言も話さなかったが、友人とはしかしまもなく別れた。――翌日の午後、私は思いがけず例の雑貨店に行き当たった。件の絵葉書はまだ陳列窓に掛けられていた。ところが、店の扉の上に、前に来た折りには目に留まらなかった表札があり、そこに赤い文字で、「セバスティアーノ・ビネス（Sebastiano Vinez）」とあるのが読めた。画家は棒砂糖〔白砂糖を円錐状に固めたもの〕をひとつと一切れのパンを付け加えていた〔絵画（とくに肖像画や風景画）が写真の興隆の犠牲になった結果、画家が写真も撮る、さらには写真家に転向する、という事態が少なからず見られた〕。

ヴァルター・ベンヤミン「壁」（連作『孤独のなかから生まれてきたお話』所収、浅井健二郎（訳）『ベンヤミン・コレクション6　断片の力』、ちくま学芸文庫、2012年、387-390頁）

断章１を除いて、いずれのテクストにも表現・表記を改めた箇所や省略した箇所がある。また、訳者註がある場合、文末に〔〕でその内容を加えているものもある。